

国語

注意事項

- 一、「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
- 二、この冊子は表紙を除き十二ページである。
- 三、「解答始め」の合図があったら、解答を始める前に以下の①②の作業を行うこと。
 - ① 掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。
 - ② 受験番号及び氏名を、必ず二枚の解答用紙のそれぞれに記入すること。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された所に縦書きで記入すること。

—
次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

私たちは自分の話をするのが好きだ。

とりわけ、自分のこれまでの話をするのが好きだ。人と仲良くなるとき、人は自分がどんな来歴で生きてきたのかを語り合
って喜ぶ。どんなハイライトがあり、どんな挫折があり、どんな成長があり……。悪いことではないようにみえる。楽しいこ
とじゃないか。

対面に限らずデジタルな環境で、とりわけSNSで、私たちは自己語りを行う。「私はこんな人である」「私はこんな苦難を
乗り越えてきた」。人々は無数の語りをつぶやき、投稿し、シェアし、いいねを押している。これも悪いことではないように
みえる。活気があり、共感があり、盛り上がりがある。

これらが目指しているのは「理解」だ。互いの信念や情動を理解し合えると嬉しい。だから人々は、自分について一生懸命に
説明する。こうした「自己語り (self-narrative)」はどんな語りだろうか。どのようなタイプの自己理解あるいは他者理解なの
だろうか。

私たちは、自分自身を語ることで互いを理解し合えると信じている。

しかし、自己語りは本当に自己理解に寄与するのだろうか。自己語りを聴くことで、他人の理解が進むのだろうか。私たち
の語りは知らぬ間に過去を歪め、理解をサマタげ、自己の虚飾を作り上げ、さらには他人への不当な解釈という暴力へと転じ
る危険を隠し持つてはいないだろうか。

就職活動の面接で、応募者はしばしば「これまでの人生」について自己語りを強要される。建前上は、応募者が自分自身の来
歴を正直に説明する場のようにみえる。だが実際には、聞き手である面接官の心に響くような特定の筋書きを意識して「自己」
が再構成されている。

これに対して拒否反応を示す人々は一定数いる。単に仕事が嫌だからだろうか。

それも理由のひとつかもしれないが、他の理由もあるだろう。その「他の理由」とは、他でもない、物語化することのフユカイさである。自分のためでない、誰かのための（面接官のための）物語化を強いられることの苦痛である。

自分が実際に生きた人生の流れではなく、面接のために自己の過去を組み替え、ときに文字通りの作り話^②フィクションを面接の場で語られる。自己分析という名の強制物語化によってその者は、自己の予測可能性を他人のために用意することを強いられている。

そこにあるのは、自己がどんなふうな来し方で自己としてやってきたのか、そして、これからどんなふうになっていくつもりなのかを作ってもらうことで、その人の振る舞いを予測し、一緒に働けるかどうかを判断したい、という雇用する側の欲求だろう。

けれど、実際に物語化をやらされる本人にとってみれば、自分の人生を切り刻み、エディットさせられる苦痛はたいへんなものになりうる。

SNS上の自己紹介や投稿も同様だ。共感を引き出すためのドラマティックな演出や反応を得るための強調や大胆な省略があり、「私とは何者か」という理解を微妙に歪めている。その歪みの悪影響は読み手だけでなく、投稿する本人にも及ぶ。

このような日常の自己語りを、私たちはどのように評価し、どのような危うさを見抜くことができるだろうか。
A こうした自己語りがもたらすのは単なる自己満足や共感ではない。

自己語りのあり方が生み出す認識的な偏りや歪みは、他人に対する理解にも影響を及ぼす。ときには、相手の人生を自分勝手な語りへと還元し、その人が自分を解釈する権利を奪うような、暴力的な「物語的不正義」へと至ることすらある。

私たちが「自分」を語るその行為は、一見すると何の問題もなく、他愛もない理解の実践のように思える。しかし実際には、過去をどのような観点や枠組みで再構築するかという、いわば歴史的・歴史学的な営みが常に背景にある。

歴史哲学における「歴史的語り (historical narration)」の分析において、歴史的語りは単なる事実の再現ではなく、再解釈のプロセスであるとされている。そのような視点から自己語りを批判的にナガめると、私たちの日常的な「自分の物語」がどの

ようにして恣意的なフレームワークを介して形づくられているのかが見えてくる。

私たちの自己語りは、ただ過去をありのままに記述するのではなく、常に何らかの枠組みのもとで語り直す行為である。この点で自己語りは、歴史学者が過去の説明に用いる歴史的語りと似ている。

歴史哲学の議論によれば、歴史的語りは過去を再構成する営みであり、その意味づけは常に新たな概念や解釈の枠組みによって変化しうる。自己語りも同様に、私たちがその都度新たな観点から自分の来歴を説明し直す行為なのだ。

歴史学を実践する人々は、過去の出来事をつないで、歴史のさまざまな「なぜ」に答える歴史的語りを行っている。「なぜ人々はヒトラーを選んだのか?」「なぜ日本政府は第二次世界大戦の開戦に突き進んだのか?」「なぜ西洋で産業革命が起こったのか?」——こうした問いに答えるために歴史学者たちは日々議論を繰り広げている。

近年再興し、目覚ましい発展を遂げている「歴史哲学 (philosophy of history)」では、この歴史的説明の特徴についての興味深い議論が行われている。歴史学の哲学を牽引する歴史哲学者の一人、ポール・ロス(注2)は、『歴史的説明の哲学的構造』において、過去の「事実」は存在せず、過去は作られると主張する。どういうことだろうか。

もちろん、過去には何らかの出来事があった。それは疑いようがない。

だが、その出来事の「意味」は常に解釈に開かれている。

私たちは、出来事の意味をいろいろと記述できるが、その記述に絶対の正解は存在しない。現在の出来事についてもそうだし、過去の出来事についてもそうなのだ。

歴史的語りとは、常に過去の再制作 (past-remaking) なのである。

ある事件が起こったとき、当時の人がその事件のすべてを理解することは不可能だ。

第二次世界大戦が始まったとき、当時の日本の人々、そして世界の人々は、状況のすべてを知ることではできなかった。大戦が後に核爆弾による最後を迎え、冷戦を生み出すとは思ってもよらなかっただろうし、それが未来の日本のあり方にもたらす意味を理解することもできなかっただろう。「ひとつの出来事についての真実全体は、あとになってから、時にはその出来事が

起こってからずっとあとにしかわからないし、……最良の証人すらも知りえないような事柄である」と歴史哲学者のアーサー・ダントーは言う。^(注3)

だが、後に生きる人々、たとえば歴史家は、当時の人を使うことのできなかつたデータや理論や道具を用いて、当時の人々が知り得なかつた事実を探っていくことができる。それゆえ実は、第二次世界大戦の特定の側面については、当時の人々よりも未来に生きる私たちのほうが、よく「理解」できているということがありうる。

歴史的語りとは、当時の出来事を新しい仕方の説明することができる不思議な営みであり、意義深い説明の様式なのである。確かに「当時の人が理解した当時の出来事の意味」を探ることも歴史学的叙述の役割だろう。当時の人々が大战をどう評価したか。日本に住む人々が開戦をどう受け止めたか。

だが、歴史的叙述は、そうした過去のフクゲンに加えて、過去がどのような意味を持っていたのかをより広い視野で解釈し、現在において過去がどのような意味を持つのかを再解釈する営みでもあるのだ。

そして何より、私たちは過去を「理解」するとき、思い出すのではなく、それを語り直す。過去をそのまま思い出すことはできない。なぜなら、過去とは本質的に、現在の私たちの語りによって更新されていくものだからである。

私たちは、語り直しによってのみ過去を理解できる。いや、語り直さざるを得ない。なぜなら、私たちは当時よりいっそうさまざまなことを知っており、新しい概念や枠組みのもとで過去を語らざるを得ないからだ。

過去を過去の人々や私たちが体験したままに、あたかも記録映像のように思い出すことはできない。なぜなら、現在の私たちは、過去とは決定的に異なったデータ、考え方、言葉をすでに持っているからだ。

現在「Y2K」がファッションスタイルとして流行している。2000年頃に流行したファッションやカルチャーのリバイバルとも言われているが、それは当時のカルチャーそのままの再現ではない。当時起こったさまざまなカルチャーの一部を取り出して、リミックスしている。「Y2K」に触れて、私たちはついつい「2000年代ってこうだったよね」と「思い出して」しまふ。けれど、それは「思い出し」ではなく、語り直しなのだ。

「思い出している」と感じているときでさえ、私たちは実は「今の自分」という、過去とは別の地点から「語り直して」いる。過去は、現在という新しい視点から叙述しなければ、それを扱うことができないのだ。私たちは、過去そのものに語らせることはできない。過去は常に新たな解釈に開かれている。

過去そのものに語らせようとしても、私たちの耳はもうすでに新しくなってしまうている。それゆえ、過去は常に私たちの解釈を経て、耳を新たにした私たちが聴くことのできる声として、聴こえてくるのだ。

だが、過去は「何でもあり」な仕方です、好きなように解釈できるわけではない。証拠として用いられる、モノや人々の語りが制約となり、語れる過去の叙述が変化する。

私たちはより適切な語りを探し求めることができるし、もし人々と共に生きることを目指すのならば、そうしなければならぬ。それは証拠と自分の歴史的語りのギャップを測ることであり、周囲の人々の語りとの齟齬そごについて訂正を行っていくことでもある。

過去は私たちがやってきたところであり、私たちが今立って日々営んでいる共通の大地である。いわば、時間的な公共物なのだ。「私たち」がどのような「私たち」なのかは、常に歴史的過去に基づいて語り合うことになる。

あなたが現在、親密な誰かと共に暮らしていると。あなたたちはさまざまな経験を経てきたはずだ。そして、いつか難しい選択肢に迫られたとき、まさしくそうした過去の経験の数々が、あなたたちを支えるだろう。しかし、過去が支えとなるためには、あなたたちのあいだで共通の過去が共有されていなければならない。

こうした共同的な作業を、実は私たちは、それほど意識せずに行っている。互いの話を聞き、歴史を語り合っている。しかし、意識することで、より適切な過去の叙述が可能になる。これは歴史の哲学から私たちが学べることだ。

さて、歴史的語りについて分かったことを整理しよう。

歴史的語りとは、独特なタイプの語りである。ある出来事が、他の出来事とどのような意味で関連しているのかを、当時の「空間的な」広がりの中で理解し、同時に当時と現在という「時間的な」広がりの中で明らかにする。これにより、二つ以上

の出来事間に因果的な結びつきをもたせるだけではなく、相互の影響の与え合いや、その度合いを把握したり、時間的な影響関係を仮説的に発見したりすることができる。

(注⁵)

哲学者カール・ヘンペルは歴史の語りを科学的説明へ還元しようとしたが、ダントーやルイス・O・ミンクをはじめとする歴史哲学者たちはその主張に異を唱え、歴史を語ることは単なる因果法則の適用ではなく、新しい解釈を生み出す行為であると、その構成的側面を強調した。

この発想を自己語り当てはめれば、私たちが自分の来歴を語る時、ただ事実を列挙するのではなく、特定の視点から再構成していることが明らかになる。

もちろん、過去を制作することにはいつも危険が潜んでいる。

過去を好き勝手に作り上げること、まさしくナチズムは、自分たちにとって都合のよい歴史の語りを介して、その悪徳なシヨギョウを正当化していた。たとえば彼らは、第一次世界大戦後のドイツの苦境を「ユダヤ人による裏切り」などという根拠の乏しい物語で説明し、ユダヤの人々に対する怨恨を深めていった。ナチズムは、自らの侵略、民族虐殺、障害を持つ人々の虐殺を「民族の再生」や「文化的進歩」の表れとして語ったのである。

過去をよりよく制作するためにはいくつかの基準や美徳を想定することができる。

(注⁷)

歴史哲学者のヨウニ＝マッティ・クツカネンは、歴史学の基準について、先ほど言及したロスとははつきりと対立する立場ながらも、次のように論じている。

歴史学者たちは、データそのものからは、唯一の「正解」としての歴史像や解釈枠組み（クツカネンの概念では「結合（colligation）」）が定まらないことを認識している。そのうえで、ある解釈枠組みが、他の解釈枠組みと比較してより整合的で、幅広く、包括的で、独創的で、事例を的確に例証しているかという五つの基準を用い、複数の可能な歴史解釈から相対的により優れたものを選び取っているという。

そのため歴史研究は、ある意味「なんでもあり」な自己語りの生成とは異なり、学問的コミュニティが作り上げてきた評価規

準によってガイドされている。歴史学において歴史的語りをを行う人々は、既存の議論に参加しながら、自らが提示する解釈が先行研究にどのようなようにして応答・接続できるのかを検討しているのだ。実際に歴史学に従事する人々は、よりよく「過去を制作する」ために、日夜歴史的語りを行っている。

^C 歴史学者とは、過去制作のプロなのである。

（難波優輝『物語化批判の哲学 へわたしの人生』を遊びなおすために』による。ただし、原文を一部改めた。）

（注1） エディット……英語 edit に由来する語。編集の意。

（注2） ポール・ロス……アメリカの哲学者。

（注3） アーサー・ダントー……アメリカの哲学者、美術批評家。

（注4） Y2K……西暦二〇〇〇年頃の文化様式。

（注5） カール・ヘンペル……ドイツの哲学者。

（注6） ルイス・O・ミンク……アメリカの歴史哲学者。

（注7） ヨウニ＝マッテイ・クツカネン……フィンランドの歴史哲学者、科学哲学者。

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部A「こうした自己語り」とあるが、それはどのような語りか。(一)就職活動の面接の例および(二)SNSの例における語りについて、それぞれ六〇字以内で説明せよ。

問三 傍線部B「不思議な営みであり、意義深い説明の様式なのである」とあるが、「歴史的語り」がなぜ「不思議な営みであり、意義深い説明の様式」となるのか。本文に即して、一〇〇字以内で説明せよ。

問四 本文中には「自己語り」と「歴史的語り」が対比的に述べられているが、この両者はどのような点で共通しているのか。一二〇字以内で説明せよ。

問五 傍線部C「歴史学者とは、過去制作のプロなのである」とあるが、それはどういうことか。一〇〇字以内で説明せよ。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

著作権の観点から、公表しておりません。

（『今昔物語集』による。ただし、原文を一部改めた。）

(注1) 大隅……現在の鹿児島県の東部。

(注2) したため行ひ……執行し。

(注3) 頭の末……頭の端々まで。

(注4) 高家……よりどころ。口実。

(注5) 思ひあつかひて……思い悩んで。思いあぐねて。

(注6) 盗人……ここでは「悪人」の意。

(注7) ただし……とこで。

(注8) わななき声をささげて……震え声を上げて。

(注9) しもと……「霜」と「答しもと(罪人の尻を叩く刑罰において使用する細い木の棒)」を掛ける。

問一 傍線部A「しどけなきことどもありければ」、傍線部B「打たせむことのいとほしくおぼゆれば」、傍線部E「ゆめゆめあなづるべからず」をそれぞれ現代語訳せよ。

問二 傍線部C「いかなることにつきてこれを免してむ」について、指示語の内容を明らかにして現代語訳せよ。

問三 傍線部D「汝、和歌は詠みてむや」について、大隅守がこのように尋ねた意図を説明せよ。

問四 波線部「しをへて頭に雪はつもれどもしもと見るこそ身は冷えにけれ」について、「雪」が比喩するものや掛詞「しもと」に留意しつつ現代語訳せよ。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお設問の都合で訓点を省いた箇所がある。

凡^{およソ}人之欲^{スル}為^レ善^ナ者^ヲ、為^{ため}性^ノ惡^{ナルガ}也[。]夫^ア薄^ハ願^レ厚^ヲ、惡^ハ願^レ美^ヲ、狹^ハ願^レ広^ヲ、

貧^ハ願^レ富^ヲ、賤^{センハ}願^レ貴^ヲ。苟^イ無^キ之^中者^ハ、必^ズ求^ム於^ニ外^ニ。故^ニ富^ニ而^レ不^レ願^レ財[、]

貴^レ而^レ不^レ願^レ執[。]苟^ル有^ニ之^中者^ハ、必^ズ不^レ及^ニ於^ニ外^ニ。用^レ此^觀之[、]人之欲^{スル}

為^{サント}善^ヲ者^ハ、為^ニ性^ノ惡^{ナルガ}也[。]今^{いま}人之性^ハ、固^{もとヨリ}無^シ礼^義、故^ニ彊^{ガク}学^{シテ}而^レ求^{ムル}

有^も之^也。性^不知^ラ礼^義、故^ニ思^{シテ}慮^{ムル}而^レ求^レ知^之也[。]然^{しか}則^レ生^シ而^レ已^ミ、

則^チ人^ハ無^ク礼^義、不^レ知^ラ礼^義。人^無礼^義則^チ乱^レ、不^レ知^ラ礼^義則^チ悖^ル。

然^{ラバ}則^チ生^シ而^レ已^ミ、則^チ悖^ハ乱^リ在^レ己^ニ。

(一)『荀子』による。

(注1) 悪……ここでは「醜」と同義でみにくいこと。

(注2) 之……直後の「於外」の「於」に同じ。

(注3) 執……「勢」と同義で権勢のこと。

(注4) 礼義……礼法と道義。社会規範のこと。

(注5) 彊学……つとめ学ぶこと。

(注6) 生……生まれつきのまま。

(注7) 乱……秩序を乱すこと。

(注8) 悖……道理に背くこと。

問一 傍線部ア「夫」、イ「苟」の読みを送り仮名を含めてそれぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部A「富而不願財、貴而不願執」をすべてひらがなで書き下し文にせよ。

問三 傍線部B「用此觀之、人之欲為善者、為性惡也」を、「此」の指す内容を明らかにして現代語訳せよ。

問四 傍線部C「今人之性、固無礼義、故彊学而求有之也」を、「有之」の指す内容を明らかにして現代語訳せよ。

問五 傍線部D「悖乱在己」とはどういうことか。本文の内容を踏まえて三〇字以内で説明せよ。

—